

第4学年国語科学習指導案

1 単元名 人物の気持ちの動きを 「ごんぎつね」

2 指導観

こんな子どもだから

- 子ども達は、これまでに情景を想像しながら人物の言動を基に人物の気持ちを考える読み方や、大事な言葉に着目して場面と場面を比べ、人物の気持ちの変化や共通点を捉える読み方を身に付けてきた。そこで本単元では、文章の山場の読み取りに必要な語や文を見つけ、場面をつないだり比べたりすることを通して、作品に貫かれている人物の心を読む読み方を身に付けさせたい。その中で、今まで以上に叙述を基に文脈における言葉の意味を豊かに考え、自分の言葉で表現できる言語感覚を養いたい。
- これまでに学習した「三つのお願い」では、親友との心のつながりが大切だということを感じてきた。「白いぼうし」では、松井さんの優しい心とそれを包み込むあたたかい豊かな表現を味わいながら楽しむ読み方ができた。本単元においては、ごんの言動の根底にずっと貫かれているひとりぼっちのさみしさを読み確かめ伝え合うことで、感想や意見を自分なりに表現する力を伸ばしたい。

こんな単元でこんな読みの力を

- 本教材は、ひとりぼっちのごんぎつねが、自分と同じひとりぼっちになったと思い込む兵十に心を寄せ、何とか自分の存在に気付いて欲しいと願う、一途な姿を描いた作品である。この作品は6つの場面から構成されており、「いたづらをする場面」「いたづらを後悔する場面」「おわびを続ける場面」と展開していく。ごんの言動に着目し、気持ちに寄り添った読み取りをさせる中で、類縁語や文末表現、呼称の変化などの表現の違いを読む読み方をさせ、語り手としての「わたし」の心に強く残っているごんのひとりぼっちのさみしさを捉えることができるようにさせたい。
- 2～6のそれぞれの場面には、兵十に近づきたいごんの気持ちの動きや高まりが描かれている。しかし、2人の気持ちがすれ違い、ごんの心の根底には常にひとりぼっちのさみしさがあることも読み取れる。自分の読みをつくる上では語り手が一番心を打たれた物語の山場となる場面を捉え、個人の読みを基にごんのさみしさを読み確かめるための計画を立て読み深めていく。これは、場面と場面、文章全体と場面との関係を考えながら場面をつないで読む力の育成につながると思う。
- この作品には、各場面でのごんの気持ちの根底に貫かれているごんのひとりぼっちのさみしさが描かれている。語り手の心に強く残っているであろうごんのひとりぼっちのさみしさを自分なりに読み深め、読み手として自分はどう思ったか書きまとめさせることで、感想や意見を持つ力につながる。

中学校での課題を受けて

■ 改善の観点 (A-2)

- 「飛び出す」「投げ込む」などの複合語や、「持ってきてやりました」「持っていきました」などの文末表現に着目させ、言葉をつないだり比べたり、外したり置き換えたりすることを通して、その言葉が表す人物の行動の様子を自分の言葉で表現させ、行動が表す人物の気持ちを思い描かせる。
- 場面と場面をつなぐ空所に着目させ、ごんの行動や気持ちを想像させることを通して、兵十への思いの高まりを考えさせる。

■ 改善の観点 (B-2)

- ごんの言動から、ごんの兵十に対する気持ちの動きや高まりを読み確かめるために場面と場面を比べたり、今までの場面をつないだりして考えることができるワークシートの工夫をする。
- ごんの言動と、作品の中に貫かれているひとりぼっちのさみしさの全体の構造が見えるワークシートを工夫し、語り手がごんの言動をどのように受け止め、何が心に強く残っているのかを考えさせる。

■ 改善の観点 (C-2)

- 「語り手のわたしは、『ごんぎつね』の何が強く心に残っているのだろう。」と読みのめあてを設定し、ごんについての自分なりの感想を組み込んで自分の読みをつくらせる。読み確かめることを通して自分の感想や読みのめあてに対する自分の考えがどう変容したかを、根拠を示して表現させる。

こんな子どもに(単元目標)

- 読みのめあてに沿って文章の山場や最も感動的な場面を捉え、場面ごとのごんの気持ちを、叙述を基に読み取り、場面と場面をつないで気持ちの動きを捉え、その根底にあるごんのひとりぼっちのさみしさを読み確かめることができるようにする。
- 語り手の心に強く残っているであろうごんの中にずっとあったひとりぼっちのさみしさを自分なりに読み取り、読み手として自分はどう思ったか感想や意見を自分の言葉で表現できるようにする。

中学校へどうつながっていくのか

- 類縁語や文末表現を、言葉の操作を通しながら具体化していくことは、低学年での「言葉の通りに読む」を踏まえて、高学年での「文脈に位置付けられた固有の意味と役割を読む」、中1での「文脈の中における語句の意味を正確に捉える」読み方につながる。また、全体の構造に着目して語り手の思いを受け止め感想をもつ学習は、「書き手の思考や心情に迫り、それを踏まえて読み手の立場から考え、文章全体を受けて自分の意見をもつ。」という中2・3のねらいにつながる。

3 学習計画（全16時間）

| 次時 | 学習のねらい | 主な学習活動と指導上の留意点 |
|-----------|--|---|
| めあてもつ | ○ 題名と冒頭をつないで読みのめあてをつくる。 <読みのめあて> 語り手のわたしは、「ごんぎつね」の何が強く心に残っているのだろう。 | ○ 題名について話し合う。 (B-2) 人物名が題名になっていることから、人物の行動をたどり、その思いを読んでいくことを確認する。 ○ 題名で考えたことや疑問に思ったこととつないで冒頭を読み、読みのめあてをつくる。 ・ 語り手が小さい時に聞いた話なのに、今も忘れられずにいることに着目させる。 |
| 読みをもつ | ○ 文章の組立てやあらすじを捉える。 ○ 読みのめあてに沿って自分なりの読みをまとめる。 ○ 個人の読みを交流し、読みを方向付ける。 <読みの方向> いたずらばかりしていたが、うなぎのいたずらを後悔して、つぐないをくり返すうちに、兵十に自分の存在を分かってもらいたいと願って一生懸命に行動した。しかし、最後は兵十に撃たれて死んでしまったごんの、ひとりぼっちのさみしさが心に残っている。 | ○ 全文を読み通し、ごんの言動をもとに場面ごとのあらすじをまとめる。 (B-2) 全体の構造を見通すワークシートを工夫する。 ○ 読みのめあてを基に、ごんの言動からごんの気持ちを考え、ごんをどう思うか自分の感想を書きまとめる。 (C-2) 「ごんぎつね」について語り手が受け止めているものを自分だったらと比べながら表現させる。 ・ 語り手が一番心を打たれたのはどの場面か考えさせる。 ・ 「語り手の心」に残ったものは「読み手の心」にも残るものであることをおさえておく。 ○ 読みを交流することにより、自分の読みを見直したり、学級全体としての読みの方向付けをする。 ・ まず少人数グループで交流させ、その後全体で交流させる。 |
| 計画を立てる | ○ 自分達の読みを確かめるために、ごんの気持ちの動きに着目した学習計画を立てる。 | ○ 読みのめあてに沿って、読みを深め確かめる計画を立てる。 ・ 読みの違いから根拠となる叙述の重なりや違いを整理し、中心文と読み確かめていくことをはっきりさせる。 |
| 読みを深め確かめる | ○ 学習計画に沿って、ごんの気持ちの動きと、その中はずっとあるごんのさみしさについて読み確かめる。 | ・ 読み取る際は、中心文をもとにワークシートに書き込みをさせる。 ・ 伝え合う場面では、まず少人数グループで交流させ、その後全体で交流させる。 ○ ひとりぼっちでくらしていたことをくわしく読み、いたずらをするごんの気持ちを読み取る。また、読み取ったことを伝え合い、自分の読みを確かにする。 ○ 兵十のおっかあが死んだこととつないで、いたずらを後悔するごんの気持ちを読み取る。また、読み取ったことを伝え合い、自分の読みを確かにする。 ○ 自分と同じひとりぼっちの境遇になった兵十への思いとつないで、おわびをくり返すごんの気持ちを読み取る。また、読み取ったことを伝え合い、自分の読みを確かにする。 ○ おわびをくり返していたごんの姿とつないで、「神様だ」と言われた気持ちを読み取る。また、読み取ったことを伝え合い、自分の読みを確かにする。 ○ これまでのごんの気持ちの動きをつないで、ごんの思いを読み取る。また、読み取ったことを伝え合い、自分の読みを確かにする。 (A-2) 類縁語や文末表現に着目し言葉をつないだり比べたりしながら、ごんの姿を具体的に思い描かせそのときの気持ちを考えさせる。 (B-2) ごんの言動から読み取ることができている気持ちを、他の場面と関係付けながら、全体構造の中で筋道をもって考えさせる。 |
| まとめる | ○ これまでの学習をふり返り、読みと読み方をまとめる。 | ○ 読み確かめたものをふり返り、題名に戻って語り手の心に強く残ったことを伝え合い、自分の感想を書きまとめる。 (C-2) 読み確かめたものをもとに、語り手が受け止めているものを、自分はどう受け止めたか表現させる。 ○ 読み方のまとめをする。 ・ 題名の働き、場面や言葉に着目した読みをまとめる。 |

第9時

4 本時 (9 / 16)

5 本時の目標

- ごんの言動を基に、兵十をひとりぼっちにさせたと思い込んで申し訳ないと思い、うなぎのいたずらだけは後悔しているごんの気持ちを読み取り、ごんのさみしさについて読み確かめることができる。

6 本時学習における授業改善の観点

- (A-2) 情景や人物の姿を思い描きながら、言葉の違いは心の違いとして読む力
 - ・ 「ちがいない。」「ちがいない。」「～だろう。」という文末表現や「おっかあは」「おっかあに」と繰り返して表現している文に着目して読むことによって、うなぎのいたずらを後悔しているごんの気持ちを想像させる。

7 本時指導についての基本的な考え方

- 本時場面は、ごんが、兵十のおっかあが死んだことを知ってうなぎのいたずらを後悔し、ひとりぼっちになった兵十に心をよせ始める場面である。村でいたずらばかりしてさみしさを紛らわしていた前場面のごんと、本時場面でのうなぎのいたずらを後悔しているごんの違いは、うなぎのいたずらに対するごんの気持ちの変容として読み取ることができる。後悔する気持ちに変容していくごんの様子は、ごんがあなの中で考えていることを表現している文章に於いて、文末表現や言葉の繰り返しに着目して読み深めていくことができる。
- 本時指導にあたっては、本時のめあてについて自分や友だちが考えたごんの思いの違いを確認し、読み確かめていく意欲をもたせる。前場面では、ごんは、村の人の気を引いてさびしさを紛らわせようとしたずらを繰り返していたが、そのことを反省する様子はなかった。しかし、うなぎのいたずらだけではなぜ後悔するのか、わけを考えさせたい。中心文「ちよっ、あんないたずらしなけりやよかった。」において、何を、なぜそんなに後悔しているのか考えさせる。その際「ちがいない。」「ちがいない。」「～だろう。」という文末表現や「おっかあは」「おっかあに」という繰り返しに着目させ、兵十のおっかあへの思いを邪魔し、おっかあを死なせてしまったと思い込んでいくごんの様子を読み取らせる。そして、ひとりぼっちになったと思い込んでいる兵十に心を寄せていくごんのさみしさを書きまとめさせる。

8 板書図

人物の気持ちの動きを
ごんぎつね
学習のめあて
新美 南吉

なぜ、うなぎのいたずらだけは後悔するのかを読み取り、ごんのひとりぼっちのさみしさを読み確かめよう。

ははん、死んだのは、
兵十のおっかあだ。

そのぼん、ごんはあなの中で考えました。
(あのうなぎはおっかあへのうなぎだったのか)

おっかあは、
うなぎが食べたいと言ったにちがいない。
(思いこみ)

おっかあにうなぎを食べさせることができなかった。
そのままおっかあは、死んじゃったにちがいない。
(思いこみ)

ああ、うなぎが食べたい、
と思いつつ、
ごんながら死んだらう。

ちよっ、あんないたずらしなけりやよかった。

自分のせいで、兵十のおっかあ
が死んで、兵十をひとりぼっち
にさせたと思っただから。

今日の学習で

「おっかあが死んで悲しいだろう。うなぎを食べさせたかっただろう。」と兵十の気持ちを考え、さみしい気持ちがよくわかり、うなぎのいたずらを後悔した。それはごんはひとりぼっちのさみしさを知っているから。

うなぎのいたずらで、おっかあを死なせてしまったと思っただから。
・うなぎを食べさせたいという兵十の気持ちをじやましたから。
・おっかあを死なせて兵十を自分と同じひとりぼっちにしたから。

いもをほり散らす。
菜種がらのほしてあるのへ火をつける。
つるしてあるとんがらしをむしり取る。

うなぎのいたずら

9 展開

| 学習活動と内容 | 指導上の留意点 |
|--|--|
| <p>1 本時学習のめあてを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 本時場面を音読する。 ○ 学習計画をもとに、ごんの思いにつながる言動をくわしく読んでいくことを確認する。 <p>学習のめあて _____</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 前時学習を想起し、挿し絵を提示して、本時場面を確認する。 ○ 証拠となる叙述をもとにして、様子や気持ちを読み深めることを確認する。 |
| <p>なぜ、うなぎのいたずらだけは後悔するのかを読み取り、ごんのひとりぼっちのさみしさを読み確かめよう。</p> | |
| <p>2 自分の読みを伝え合い、考えを確かめていく。</p> <p>(1) 自分や友達が考えた、ごんが後悔するわけの違いを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ うなぎのいたずらでおっかあを死なせたと思ったから。 ・ うなぎを食べさせたい、という兵中の気持ちをじゃましたから。 ・ 兵中を自分と同じひとりぼっちにしてしまったから。 <p>(2) 「ちよっ、あんないたずらしなけりゃよかった。」と考えたときの、ごんの気持ちを話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「あんないたずら」について <ul style="list-style-type: none"> ・ 兵十が取っていたうなぎへのいたずら ○ うなぎのいたずらだけを後悔するわけについて <p>(A-2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「ちがいない」という文末表現を繰り返したり、「おっかあは」「おっかあに」と繰り返し表現したりしていることに着目し、深く後悔しているごんの気持ちを捉える。 <p>(思い込んでいくごん)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ うなぎを食べたいと言ったにちがいない。 ・ そのまま、死んじゃったにちがいない。 <p>(兵十のおっかあへの思いを想像しているごん)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「おっかあは、」「おっかあに」「おっかあは、」 <p>自分のせいで、兵十のおっかあが死んで、兵十をひとりぼっちにさせたと思い込んだから。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 前時の書き込みをもとに、自分の考えとの共通点や相違点を明らかにさせ、確かめていく箇所を確認させる。 ○ 前の場面を振り返り、うなぎへのいたずらの他は後悔していなかったこととつないで考えさせる。 ○ 指示語に着目させることで、多くのいたずらの中でも、うなぎのいたずらについてだけ後悔していることを確認させる。 <p>(A-2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 文末表現や言葉の繰り返しに着目させることで、兵十のおっかあへの思いを邪魔してしまったことへの後悔の気持ちを読み取らせる。 ○ 「～にちがいない。」を「～のだろう。」に置き換えて、ごんの思い込みの強さを捉えさせる。 |
| <p>3 伝え合ったことをもとにして、読み確かめたごんの思いを書きまとめる。</p> <p><予想される子どもの反応></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「おっかあが死んで悲しいだろう。うなぎを食べさせなかっただろう。」と兵十の気持ちを考え、さみしい気持ちがよくわかり、うなぎのいたずらを後悔した。それは、ごんは、ひとりぼっちのさみしさを知っているから。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ ひとりぼっちのさみしさを知っているごんは、ひとりぼっちになった兵十のさみしさがよくわかること、また、兵十のおっかあに対する思いのじゃまをしてしまい深く後悔していることとつないで、ごんの思いを書きまとめさせる。 |
| <p>4 本時学習のまとめと次時学習の確認をする。</p> <p>(1) 読み確かめたことを発表し合い、読み方のまとめをする。</p> <p>(2) 次時は、おわびを繰り返すごんの気持ちを読み取っていくことを確認する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 書きまとめたことを発表させ、ごんの思いを確認する。 ○ 今日の学習で学んだ読み方の良さをまとめ、次からの学習にも生かしていけるようにする。 |

第11時

4 本時

5 本時の目標

- うなぎのいたずらに対して精一杯おわびをすることを通して、兵十に気持ちを寄せていっているごんの気持ちを、前の場面とつないだり文末表現に着目したりして想像し、その根底にあるひとりぼっちのさみしさを読み確かめることができる。

6 本時学習における授業改善の観点

- (A-2) 情景や人物の姿を思い描きながら、言葉の違いは心の違いとして読む力
 - ・ 「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」という文を中心に、前の場面に描かれたごんのひとりぼっちのさみしさとつないだり、「投げこんで」という複合語や「持ってきてやりました。」と「持っていました。」という文末表現を比べたりしながら読ませ、おわびをくり返す中で兵十へと気持ちを寄せていくごんの気持ちを想像する中で、ごんのひとりぼっちのさみしさに気付かせる。

7 本時指導についての基本的な考え方

- 本時は、ごんがうなぎのいたずらに対して何度も何度もおわびをくり返す様子をくわしく読む中で、兵十に心を寄せていくごんの気持ちの変化を基に、ごんのひとりぼっちのさみしさを読み確かめていく学習である。本時場面には、兵十に対するごんの気持ちが単なるおわびの気持ちから、境遇を同じくするという思い込みからの同情や共感へと変化していく様子が描かれており、それはおわびをくり返すごんの言動の変化などから読み取ることができる。複合語や文末表現に着目し、言葉をつないだり比べたりすることを通して、ごんの様子や気持ちの変化、その根底にあるひとりぼっちのさみしさを読み確かめることができる。
- 本時指導にあたっては、まず「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」という文を中心に、おわびをくり返すごんの気持ちについて読み深めていく。その際、前の場面までに読み確かめたごんのひとりぼっちのさみしさとつないで、ごんは何が「同じ」だと思こんでいるのかを読むこと、文末の「～か。」という落ち込みを表す表現を読むことで、兵十の気持ちに寄り添おうとするごんの気持ちを読み深めていく。さらに、「投げこんで」という複合語や、「持ってきてやりました。」「持っていました。」という文末表現を比べることで、兵十に毎日毎日くりや松たけを持って行くことをくり返すごんの気持ちが、単なるおわびの気持ちから自発的な気持ちへと変化し、兵十に気持ちを寄せていっている様子を読み深め、ごんのひとりぼっちのさみしさを読み確かめていく。

8 板書図

人物の気持ちの動きを
ごんぎつね
新美 南吉

学習のめあて
毎日毎日、兵十におわびをくり返すごんの気持ちを考え、ごんのひとりぼっちのさみしさを読み確かめよう。

いつもひとりぼっち
家族がいない
さみしいらうな。かわいそうだな。
なんとかしてやりたいな。

「おれと同じひとりぼっちの兵十か。」
思いこんでいる
兵十のうちのうらら口から、
うちの中にいわしを投げ込んで、
…

次の日には、ごんは山でくりをどつさり拾って…

次の日も、その次の日も、ごん、はくりを拾っては

その次の日には、くりばかりでなく、
兵十のうちへ持ってきてやりました。
よろこばせようと思ったのに、悲しませてしまった
元気つけてあげたい。さみしくないようにしたい

兵十をよるよるばせたいな。今日は元気になっただけかな
兵十に思いが通じてほしいな。付いてくれるかな

自分の考え
松たけも二、三本持っていきました。

今日の学習で
・ 自分のおわびを深く反省している。
・ ひとりぼっちになった兵十に同情している。
・ 兵十に自分のことをわかってほしいと思っている。

はじは、うなぎのいたずらを通して、自分と同じひとりぼっちの兵十のおわびの気持ちの動きをくりや松たけを持っていった。それがだんだんと兵十に気持ちをよせようになっただけで、それはずっとひとりぼっちだった。ごんのさみしさがあつたから。

9 展開

| 学習活動と内容 | 指導上の留意点 |
|---|--|
| <p>1 本時学習のめあてを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 本時場面を音読する。 ○ 学習計画をもとに、ごんの思いにつながる言動をくわしく読んでいくことを確認する。 <p>学習のめあて _____ 毎日毎日、兵十におわびをくり返すごんの気持ちを考え、ごんのひとりぼっちのさみしさを読み確かめよう。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 前時学習を想起し、挿し絵を提示して本時場面を確認する。 ○ 証拠となる叙述を基にして、様子や気持ちを読み深めることを確認する。 |
| <p>2 自分の読みを伝え合い、考えを確かめていく。</p> <p>(1) 自分や友達が考えたごんの気持ちを確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のいたづらを深く反省している。 ・ ひとりぼっちになった兵十に同情している。 ・ 兵十と分かり合いたいと思っている。 <p>(2) 「おれと同じ、ひとりぼっちの兵十か。」と思ったときの、ごんの気持ちを伝え合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「おれと同じ」について <ul style="list-style-type: none"> ・ いつもひとりぼっち ・ 家族がいない ○ 「兵十か」について <ul style="list-style-type: none"> ・ 悪かったな ・ さみしいだろうな ・ かわいそう ・ なんとかしてあげたい ・ 元気付けてあげたい <p>(3) 兵十に何度も何度もくりや松たけを持っていくごんの様子から、ごんの気持ちがどのように変化していったのか伝え合う。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 前時の書き込みをもとに、自分の考えとの共通点や相違点を明らかにさせる。 ○ 少人数グループで話し合わせた後、全体で伝え合わせる。 ○ 前の場面とつないで、兵十に寄り添おうとするごんの思いを考えさせる。 ○ 兵十が一人になったと思い込んでいることや、何が同じだと思っているのかを考えさせる。 ○ 文末表現に着目し、「自分と同じになってしまったのか」と思い込んで、改めて後悔する気持ちを読み取らせる。 |
| <p>(A-2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「投げこんで」などの複合語や「持ってきてやりました。」「持っていきました。」などの文末表現を比べ、ごんの気持ちの変化や高まりを捉える。 <p>↓</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「投げこんで」…思いつきの行動→おわびの気持ち ・ 「持ってきてやりました。」…兵十にしてやっている→おわび・同情の気持ち ・ 「持っていきました。」…自分がしたくてしている→兵十に気持ちを寄せていっている | <p>(A-2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 文脈の中で、表現の違いを考えてごんの姿や気持ちを思い描かせ、それを兵十に対するごんの気持ちの変化、高まりとして捉えさせる。 ○ 実際に、いわしを投げ入れる様子やくりや松たけを持っていく様子を動作化させることによって、ごんの気持ちに迫らせる。 |
| <p>3 伝え合ったことをもとにして、自分なりに読みのめあての答えを書きまとめ、自分の感想を書く。</p> <p><予想される子どもの反応></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ はじめは、うなぎのいたづらを反省し、自分と同じひとりぼっちになったとう思い込みからくる兵十へのおわびや同情の気持ちでくりや松たけを持っていった。そしてだんだんと兵十に気持ちを寄せていった。それはずっとひとりぼっちだったごんのさみしさがあったから。 ・ 兵十に気付いてもらえないごんはかわいそう。 ・ 気付いてもらえなくてごんはさみしいだろう。 | <ul style="list-style-type: none"> ○ 今日の学習で読み取った、おわびをくり返すごんの様子や気持ちの変化、兵十への思いの高まりをもとに、自分の考えを見直し、書きまとめさせる。 ○ これまでの自分の経験とつないで、自分なりの感想を持つことができるようにする。 |
| <p>4 本時学習のまとめと、次時学習の確認をする。</p> <p>(1) 読み確かめたことを発表し合い、読み方のまとめをする。</p> <p>(2) 次時は、「神様だ。」と言われたごんの気持ちを読み取っていくことを確認する。</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○ 書きまとめたことを発表させ、ごんの思いを確認する。 ○ 今日の学習で学んだ読み方のよさをまとめ、次からの学習にも生かしていけるようにする。 |